

アドラー心理学の基礎

—第17回日本アドラー心理学会総会 講演記録—
不登校傾向への対策

バーナード・H・シャルマン

記録・訳

岸見一郎（京都）、ダイアン・リマー（福岡）
酒井朋子（愛知）、山内美代子（福岡）

要旨

キーワード：

私が話す番になりました。私は不利な立場にいます。これまで何が話されてきたのかわからないのですから。しかし、ここにいられることを幸せで、光栄なことに思います。こうして、ここにいるすべての人にお会いできることを嬉しく思っています。日本という国はすばらしく、この東京は畏怖の念を起こさせます。あまりに複雑ですから、きつともっとも知的な人だけがその中で生き残ることができるのでしょう。会う人々は皆礼儀正しいので、誰もが野田先生に師事して学んだのではないかと思ったほどです。

野田先生からアドラー心理学（個人心理学）について話すようにと依頼されました。私はどんなレベルで話したらいいのか、どんな人が私の話を聴くのかとたずねました。すると先生は、聴衆は非常に見識が高いので、高いレベルで話をし、講義の後で質疑応答の時間を取ってほしいといました。個人心理学は広範なテーマであり、そのすべてを扱おうとすれば何日も何日もかかります。ですから、ここでは個人心理学について概括的に話そうと思います。

個人心理学は誕生しておよそ百年になります。どんな理論でも百年も続くものは、まず第一に何かいいものであったに違いありません。たしかに理論に変化はありましたが、実際には理論の発展なのです。例えば、今日、個人心理学の理論を発展させ始めようとするのであれば、アドラーと同じ言葉は使わないでしょう。個人心理学（Individual Psychology）という名前は、この心理学にとってはあまり適当な名前ではありません。個人心理学は、人間社会の中の人間個人のための心理学です。そして、この心理学は、人間とその行動を人間の社会的な環境から切り離すことはできないと教えています。それゆえ、ある意味で社会心理学です。個人は集団の一員であると見なされているのです。

個人心理学は主として普通の人々の心理学です。精神病理学は病気の側から人間を見ます。はっきりさせておきたいことは、ここではすべての種類の精神病について扱おうとしているのではないということです。ある種の精神病は身体の障害によって引き起こされるからです。ここでは、私は「心」（サイキー、psyche）の障害について話そうとしています。「サイキー」（psyche）とい

う言葉は、もともとギリシア語では「魂」(soul)を意味しました。日本語に魂に相当する概念があるかは知りませんが、宗教が以前のようなあり方をしていないアメリカでも魂は主として宗教的な意味で使われており、心理学的な意味では使われていません。そこで「サイキー」という言葉は、実は、精神の機能、心の機能の障害のことを指す、あるいは、意味しています。精神病理学という言葉を使う時に私が意味しているのは、見分けのつく身体の疾患によって引き起こされるのではない心の機能における障害です。

理論が発達するにつれて理論の根本的な面は何かということについての議論がなされてきています。アドラーは昔、理論を創始した時、最初に「器官劣等性」について語りました。身体のある部分に障害があれば、身体全体がその障害を補償しようとするという考えです。後にアドラーはこの考えをどんな劣等感も何らかの形の補償を引き起こすという概念にまで広げました。今日、理論を発展させようとするならば、私は「劣等感」という言葉は使わないでしょう。私なら「自己」(self)という概念を使うでしょう。私が自己について話すと、誰もが私の意味するものをわかっているかのようにですが、実際には自己は説明するのが困難な概念です。誰もが自分自身を経験することができます。英語では私自身(myself)、あなた自身(yourself)、彼自身(himself)というような言葉を使うことは容易です。これらの言葉をこのようにして使っている時に私たちがしていることは、「同一性」(identity)について話しているということです。同一性の概念は私たちが共通して経験していることですから、最近まで科学的な方法でそれが何であるかを明らかにしようとした人は誰もいませんでした。最近になって初めて自己を研究したり自己にテストを課そうとして「自己とは何か」「自己を計る時に何を計るのか」と問わなければならなくなってきたのです。

アドレリアンが自己についてどのように考えているかを精神分析の視点と比較することで叙述したいと思います。精神分析においては「一次ナルシズム」と呼ばれる概念があります。一次ナルシズムとは、新生児が自分の「要求」や「衝動」のいくつかを満たそうとする事実を指しています。このように話す時、私は精神分析の言葉を使っています。精神分析においては幼児が要求を満たすことは、しばしば社会集団の要求と衝突します。そこでフロイトは抑圧の理論を展開し、『文明とそれの不満』という本を書きました。アドラー派の理論はこれとは異なった結論に到ります。アドラーはこの問題と格闘しなければなりません。当時アドラーが定式化しようとしていたことを叙述するために使える言葉がなかったからです。『人生の意味の心理学』に非常に重要な文があります。第6章の最初の文です。「生まれた時からすぐに幼児は母親との関係を確立しようと試みるだろう」。個人心理学においては一次ナルシズムというものはありません。幼児はただちに結びつくようとするのです。

人間は社会的な動物です。人間は集団の中に生きています。幼児は自分自身を世話することができず、大人になるには長い時間を必要とします。昆虫だけが成体の段階よりは幼生の段階でより多くの時間を過ごします。哺乳類では、子どもでいる時間は短く、成体になってからの生が長いのです。人間は大人になる前に、人生の20パーセントから25パーセントを過ごします。それゆえ、子どもを育てる期間は動物の中でもっとも長いのです。性的な成熟に達するのに人間と同じだけの時間がかかるのは、象だけだと思います。幼児はこのような長い時間親を必要とするので、種の保存のために結びつきが必要です。個人心理学の理論の根底にあるのはこの概念であり、当然、個人心理学という名前が間違っているというのはこういうわけです。

人間は基本的には社会的であり、根本的に協力的であり、親とうまくやっていくことを学びます。幼児は結びつくことを求めます。この原理とフロイトの「快樂原則」との重要な違いに注目してください。人間はもちろん快樂と苦痛を経験することができ—経験する内蔵プログラムを持っていて、ハードウェアに組み込まれており—時に私はコンピュータ言語は有用であると思うこ

とがあります—観察可能なある本能的なプログラムを持っています。人間の幼児は、もちろん、嫌な、あるいは、つらい状況を回避しようとするでしょう。しかし人間の幼児が行うことができる一番主要なことは、泣くことでコミュニケーションを行うことです。子どもには親は絶対的に必要です。種の保存について考えるのであれば、人間という種はこの惑星において生き残ることに成功してきました—これまでのところは。おそらく私たちは自分自身を破壊することになるでしょうが、まだ今のところは破壊していません。個人心理学の見地からすると、精神的な健康は、人間の集団に完全に参加できるということです。幼児が成長するにつれて親がすることができるもっとも重要なことは、子どもを養育し、子どもを大人の人生に向けて準備させることです。人間の脳と大人の人生に到達するまでにかかわる時間の長さのゆえに学習は非常に重要なものになります。この長い学習期間はまた誤ったことを学ぶ機会をも与えます。それゆえ個人心理学の見地からすれば、親と教師には子どもを育て、種を保存し、次の世代を準備する時に非常に重要な仕事があります。

子どもたちの仕事は自分自身を準備することです。子どもたちは学習しなければなりません。子どもたちは学ぶことに魅力を感じる時にもっともよく学びます。人間は情報に引かれます。人間にとってもっとも重要な情報は人についての情報です。こういうわけでゴシップのコラムを読み、人について知りたいと思うのです。お互いに人について話します。人は私たちににとって一番興味深いものです。

ここで横道にそれで動機づけについて話しましょう。再び比較のために精神分析を使うことにします。精神分析においては、動機づけは衝動におけるエネルギー、即ち、リビドーの衝動と攻撃衝動に起因します。個人心理学においては動機づけは、後ろから押されることではなく、前へと引っ張られることから起こります。「選択、優先」(preference) から起こるのです。選択という見地から考えれば、人が何にもっとも注意を払うか仮定することができます。幼児の行動を研究した人であれば、幼児は母親の顔を他の何よりも長く見るということを知っています。テレビの前に何時間もすわって他の人の顔を見るのは人間だけです。犬ならどこかにいってしまうでしょうし、猫なら寝てしまうでしょう。これは人間が持っている情報の「選択」を示しているとは私は考えます。この部屋にすわっている皆さんがここにおられるのは情報が好きだからです。そこで行動のもっとも強力な動機はアドラー心理学においては「情報を収集する」動機です。私たちは知りたいと思います。二千年以上前にアリストテレスという名前の哲学者がいました。アリストテレスの著作の一つは次の文で始まっています。「すべての人は生まれつき知ることを欲求する」。

子どもは成長するにつれて、課題に直面します。当時アドラーが使った言葉は「タスク」(task)です。子どもはタスク、仕事を持ち、自分自身を世話できるようにならなければなりません。子どもが幼い時は、親が世話をし、養い、安全、子どもにとっての安全を確保しなければなりません。しかし子どもも自分自身を世話できるようにならなければなりません。子どもが次に学ばなければならないことは、事を行う方法です。幼児は幼い時に実験することを始めます。親指をしゃぶる子どもがいたら、幼児が非常に早い年齢でなんとかして親指を口の中に入れてようとして、ついには口の中に入れてられるようになるのに気がついたことがあるかもしれません。子どもが這ったり、歩いたりし始めるのを見れば、子どもが技術を学んでいるのを見ることができます。技術を学ぶこと、新しい技術を学ぶことは、人間にとって非常に満足を与えることなのです。

アドラーはこれらのことに様々な名前をつけました。時に「優越性の追求」(striving for superiority) について語りました。これは悪い名前でしたが、既に劣等性 (inferiority) という言葉を使っていたから、優越性という言葉を使ったのです。これは英語の翻訳でのことです。ドイツ語では違う言葉を使います。劣等性という言葉を使いません。「価値が低いこと」という意味の言葉 (Minderwertigkeit) を使います。そこで他の人のようには上手に何かができないとい

うことが劣等感を帰結するのではなく、劣等感を帰結するのは、人は他の人ほど価値はない、他の人に匹敵しないという感情なのです。このことは関連した問題を引き起こします。いつ人は対等の価値があると感じるかという問題です。すぐにこの問題に入りますが、このことは個人心理学において精神的な健康への鍵の一つだからです。

先に話したことは、幼児が生まれてすぐにし始めることの一つは、絆を作ること、結びつくということです。最初は母親と結びつきますが、その後子どもと他の人間との関係が発達するにつれて、この結びつきはまわりにいる他の人へと広がっていくことができます。アドレリアンにとってこの最初の母親との結びつきが生じることは非常に重要なことであり、早い時期に形成されなければなりません。発達においては重要な時間という要素があります。発達においてはあることが適切な時に起こらなければなりません。さもなければ発達は適切には起こらないからです。

親である人は幼児の人生には 10 ヶ月頃にいわゆる「分離不安」を示し始める時期があることがわかるでしょう。幼児は母親の顔を好む (prefer) だけではなく、母親から離されることに激しく抵抗します。この段階において幼児は人間の共同体により参加しているのです。今や決断をしています。このように早い時期に人が決断ができるということは、後に意思遂行能力が発達することを予め示しています。私たちは大人が決断できることを望みます。子どもたちが適切な決断をすることを学んでほしいと思います。子どもたちが実際に決断する準備ができていないうちに決断をし始めると、私たちは心配し始めます。これが西洋社会において思春期が子ども時代よりも荒れ狂う時期であることの原因です。思春期においては発達の新しい段階に到達し、青年は今や新しい課題を持つに至ります。親と分離し、願わくば次第に、あまり衝動的にはなく完全な大人の社会に入っていけるという課題です。

子どもがこの思春期という特定の時に対処している課題は、子どもの自信に関係があります。子どもが歩くようになる、話すようになる、自分自身の感情を扱うようになる、新しい状況に対処できるようになる、人と関われるようになる、安全な状況と危険な状況を認識できるようになるという能力は、すべて大人の人生の準備の一部です。この準備は、時が進むにつれて次第に行われます。この仕事は、最初は親が、しかしやがて子どもが引き受けるようになっていくのです。ここでもまた情報が重要であることがわかるでしょう。

私たちが通常今日話しているような情報は外から得るものです。しかし私たちが得るもっとも重要な情報は、私たち自身と外との間の結びつきから由来する情報です。私たち自身の経験が私たちにとってもっとも重要な情報を提供するのです。それゆえ、子どもが様々な経験をするのは重要なことです。

そこで、個人心理学の観点からすると、人間の行動の根本的な動機は、人間が社会集団の一員であるということに関係しています。大抵の場合、私たちをもっとも動かすのは社会的な動機です。私たちの行動は社会的な領域で起こります。これらすべてのことは何を意味するのでしょうか？ 人間心理学の見地からすると、首肯よく精神的に健康な人間になるためには、人間は人間社会に参加するのではありません。子どもの時は子どもがすることを、大人になった時は大人がすることをしなくてはなりません。このことについて個人心理学者はいろいろな仕方で語っていますが—おそらくルドルフ・ドライカースがこの概念を用いる時にもっとも重要だったのですが—人間に所属感を与えるものは、人が貢献していると理解しているということです。ドライカースはこのようにしていました。もしもあなたが何かを得たり、成功しなければならぬのであれば、そのことを毎日繰り返さなければならない、と。もしもあなたが貢献したのであれば、それは永遠のものであり、再び行う必要はありません。もうそれをしてしまったのです。貢献しているのであれば、貢献していると感じ、そのように信じているのであれば、価値があまりないと感じるのは非常に困難なことです。別のいい方をするならば、劣等感をもっともよく補償

するのは貢献することであるということになります。

このことから個人心理学におけるもう一つの不幸な言葉に到達します。英語では“social interest”（日本語では「共同体感覚」）と呼ばれるものです。この言葉は専門用語として使ってください。“social”にも“interest”にも関係がないのです。ドイツ語では *Gemeinschaftsgefühl* といいます。ドイツ語はいくつかの語を結びつけて、一つの大きな言葉にします。しかし *Gemeinschaftsgefühl* が意味するのは、「集団の一部であると感じること」、あるいは、よりよい英語の翻訳は “a sense of togetherness”（一緒にいると感じること）です。比喻を使うならば—そうすれば絵が思い浮かび、通常普通の言葉よりもすぐれているのですが—「私たちは皆同じ一つのボートの中にいる」という感覚です。日本語にもこれに相当する言葉があるでしょうね。この「私たちは皆同じ一つのボートの中にいる」という感覚は、人を切り離すというより結びつける感情であり、物事を他の人の目を通して見ることを可能にし、疎外感を減じます。ここで私は英語を使っていますが、日本語では適当な言葉が、何であるかはわかりません。それは理解し、理解されるという感覚です。このような感情が人がお互いに協力することを可能にすることがおわかりでしょう。これによって、すべての人の幸福という見地から考えることが可能になります。これがいわゆる “social interest” です。このラベルそのものが大いに誤解を生むことになるでしょう。言葉が誤っているからです。

この共同体感覚を計るという試みがなされてきました。どのテストが妥当で、そうでないかについてテストをする人の中で異論がありました。あるテストは他の人から認められる必要を計りました。別のテストは他の人を喜ばす必要を計りました。どちらも明確に共同体感覚を計りませんでした。共同体感覚は他の人の幸福への関心であって、必ずしも他の人を喜ばせることではないからです。

さて、人間が成長するにつれて、異なった年齢の異なった人を調べると、共同体感覚は他の動機のいくつかよりも遅く発達するということがわかります。基本的な欲求についてのマズローの研究においては、人の必要が統合と人生への哲学的なアプローチへと向かうのは、人生の後の段階になって初めてであるとされています。同じことはエリクソンのいう発達の段階にも当てはまります。子どもについてのピアジェの研究において、道徳感と思春期になるまでは発達しません。そこで異なった年齢において人は異なった選択をするのです。私は「必要」(needs)という言葉よりも「選択」(preference)という言葉をより好みます。私は選択をどれだけの注目がそれに払われているかを計ることで計ることができます。

ここまで私が行ってきたことは段階を追って理論を構築することです。私は人間とは何であり、どこに向かっているかを説明しようとしてきました。これは野田先生が無神論的アプローチと呼んだものと一致すると思います。今まで私が話したのはアドラー心理学の理論の一部です。他には発達段階について話すことができます。動機づけそのものについて話すことができます。特定のタイプの行動について、そして、それをどう理解するか話すことができます。精神病的な、あるいは異常な行動について語るすることができます。健康や行動の変容への介入の方法について語るすることができます。個人的な問題、集団の問題について語るすることができます。今回私たちが扱うことができなかつた人生の他の面についても語るすることができます。睡眠、夢、感情そのもの、不安、愛については話していません。人々の間の関係において起こりうるあらゆることについて話していません。対象関係としての人間関係論、あるいはコフトの自己対象とは違って、アドラー心理学においては、人は人であって対象ではありません。人は人であって、決して、対象ではないのです。

シャルマン先生への質問

——人間とは誰・何であり、どこからきて、どこへ行くのか——このことと「共同体感覚」とはどのように関係があるのでしょうか？

人間は動物の一つの種であると考えたいと思います。人間は動物の一つの種であるといっても、皆さんのお気に障らなければいいのですが。というのも、これまで私は人間を動物にたとえたことで批判を受けてきたからです。私を批判した人は私に、人間は魂を持っているが、動物は魂を持っていないといいました。私はその分野の専門家ではありません。もし私が人間を哺乳動物の他の種と比較するならば、私は人間は、先に述べたように、動機づけられるものであると見ます。私たちはちょうどゴリラが自分自身の集団に忠実であるように、あるいは狼が自分自身の群れに忠実であるように、私たちの集団に忠実です。私たちは雑食動物です。それゆえ、私たちの生きられる範囲は広く、他の大抵の動物よりも世界の多くの場所で生きることができます。私たちは容易に世界を移動できます。私たちは他の種にとって、もっとも危険です。環境に対してもっとも支配力を持っています。最初は小さな集団で住んでいましたが、部族を形成するようになりました。そして早い時代に部族は互いに闘いました。ついに部族は互いに闘うのをやめ、その代わりに互いに交易を始め、部族同士で結婚するようになりました。そしてついに互いから学び始めました。

私たちが生きようになつて何世紀にもわたって今日「グローバリゼーション」(地球化)と呼ばれているものに向かってきました。このことに慣れていない人にとっては、このことはやっかいな考え方です。しばしば部族にとって脅威であると思えるからです。ますます移動できるようになると、家族の緊密性は減ってきました。以前のように一緒に住むことはなくなりました。私たちが種としてはグローバリゼーションに耐えられない可能性があります。

人の認知能力についてのテストは、人間の脳は一定の量の複雑さだけを扱えることを示しています。しかしテストによってすべてのことがわかるわけではありません。普通、もし誰かに「あなたに五つのものの名前をいいますから繰り返してってください」といえば、被験者は五つのものを繰り返していうことができるでしょう。記憶力に問題があるということの一つの兆候は、五つのものを繰り返していえないということです。人間にとっての通常の最大量は七つです。しかし訓練によって 50 のものを覚えることができます。そこで大抵の場合、私たちが脳のすべての力を使っていないということ、あるいは、まだ脳のすべての力の使い方を学んでいないということは、明白です。

先に私は、子どもたちは様々な経験をしなければならないといいました。子どもたちは安全で支えられていると感じる時、もっともよく学びます。子どもたちに「そう、君はそれができるよ」といえば、子どもはそのことをできるようになるでしょう。そこで、私は人間がグローバリゼーションと様々な人々、慣習、文化に対処することは可能であろうと思います。しかしそのためには時間がかかり、訓練が必要でしょう。訓練を受けない人はこのような変化に脅かされると感じるでしょう。

ジョージ・ケリーの「人格構成」の理論の言葉を使えば、世界を見る方法を変えなければならないだろうという脅威が生じるでしょう。もしも今あなたが世界を見ている方法が誤っていれば、そして今使うことができる世界を見る他の方法を持っていなければ、突如として世界で何が起きているかわからなくなります。いいかえると、私たちは必要な情報を持っていない時に脅かされるということです。そこで、私は困難はあるだろうが、ついには世界は一つになるだろうと信じています。しかし忠誠を誓うためにある小さな統一体を依然として保ちたいと願います。世界

全体に属しており、世界全体に貢献しているという感覚は、多くの人が持つものではないでしょう。そこで私たちは属していると感じられ、忠誠を感じられる場所が常に必要です。おそらく私たちが通った大学、住んでいる町、野球チーム、これらはすべて依然として私たちが忠誠を感じ、属していると感じられる場所です。人間は家族とか集団とかはつきりとした集団を常に必要とします。私は世界の全体に属していると感じることはできません。全体の世界というものを知らないからです。私の経験は私を変えました。今回私は初めて日本にきました。日本はもはや未知の国ではありません。日本にきたことがあるシカゴの人に話すと、皆私にいいました。「気に入るよ」と。彼らは正しかった！今私は日本について以前とは違う感覚を持っています。経験をしたからです。

所属感がどんどん大きくなるという可能性は常にあります。私たちは一つ以上の集団に属することができます。人は所属するのに小さな集団をいつも探すだろうと思います。それはいいことだと思います。人間は所属する必要があるからです。しかし理想、私たちが向かっていく目標は拡大していきます。種は地球中に広がっています。地球は私たちがいなくなればずっとよくなると感じている人がいます。既に地球にはあまりに多くの人間がいると感じている人もいます。しかしこれが人間という種が行こうとしていると思えるところなのです。私たちの種を減らすことができるかどうかは私はわかりません。私はそうはならないだろうと思っています。ともかく、私たちは種としてはこのような存在なのです。各々の個人が成長し年を取るにつれて、年のいった人は種の未来の見地から考えることができます。子どもを持ち孫を持てば、さらに未来について考えることができます。それがどうなるか問うことができます。私はこれが人生における発展的な段階だと思います。

さて、質問はこのことが共同体感覚とどうかかわるかということでした。アドレリアンは、共同体感覚は、ちょうど言語が生まれながらの能力であるように生まれつきの能力であると考えています。言語が幼児において発達するのは、母親が赤ん坊に話しかけるからです。母親は赤ん坊の顔を覗きこみ「母親の音」を立てます。赤ん坊は母親の顔を見て微笑み「赤ん坊の音」を立てます。そして二人ともそのことを大いに楽しみます。このようにして子ども、幼児は話すようになります。可能性は生まれつきなのです。私は人間の種の幸福に関心を持つという可能性は生まれつきであると考えています。もしも自分自身の生存のことを考えなければならず、敵、とりわけ人間の敵に囲まれているならば、不幸であったり、あなたの人生が不幸であれば、人間という種の幸福について考えることは困難だと思います。自分のことと他の人のことをよしと思える時にはこのことは容易であると思います。

シカゴで専門家として働くなかで、多くの裕福な人に会う機会がありました。生まれついて裕福だった人もあれば、非常に成功したビジネスマンもいました。生まれついて裕福な人と自分で富を得た人とでは重要な違いがあることに気がつきました。生まれついて富裕な人は自分で富を築いた人ほど慈善事業に寄付しなかったのです。自力で成功した人は寄付することを楽しみました。生まれつき富裕な人よりも寛大でした。いい人でもありました。彼らは成功した人でした。私は経済的には成功したが、交友関係では成功しなかった人にも会ったことがあります。そのような人のことを他の人は気に入りませんでした。慈善事業に寄付をしてもそのような人を受け入れようとはしませんでした。違いは、あまり受け入れられない人が寄付したのは貢献するためではなく、自分が受け入れられるためであることにあると思えました。私はこれらすべてのことは、他の人の人生に影響を生ずる貢献ができることは、非常に満足できる営みであることを意味すると思えました。人間という種の理想の未来はすべての人間が貢献する機会を持っており、自分が行った貢献のゆえに認められるような未来だと考えます。私の答えがこんなに長くなるとは思っておられなかったでしょう。

—なぜ“social interest”がドイツ語の“Gemeinschaftsgefühl”（共同体感覚）の訳語として選ばれたのですか？

私は同じ質問を自分でしてみました。一時、英語では“community feeling”（共同体感覚）という言葉が使われていました。本当かどうかわからないのですが、アメリカでは“community feeling”という言葉はあまりに共産主義的に聞こえるという話を聞いたことがあります。アメリカには強い反共産主義感情がありました。1930年代の大部分の個人心理学者はヨーロッパからの移民で、共産主義者であると見なされることを恐れていました。このことには理由がありました。アドラーはウィーンで社会民主党员でした。アドラーの妻は共産主義者でした。アドラーの長女と夫はロシアに行ってしまいました。そして当時、アメリカでは誰にとってもどのようなものであれ共産党との結びつきがあることは危険なこと…危険なことではありませんでした、不便なことでした。とりわけ移民で仕事を得心している場合は不便なことでした。こんな話を聞いたのです。おそらく本当でしょう。“social interest”もやはりよくない用語です。Gemeinschaftsgefühlが実際に何であるかを伝えていません。

—「人は人であって対象ではない」ということの意味をもう少し説明していただけませんか？

私は「人は人であって、対象ではない」といいました。その時私が言及していたのは対象関係論が用い、コフトが人について語る時に用いている言葉です。対象関係論の人は、他の人を叙述する時に「対象」(object)という言葉を使います。

彼らがそうするのは理由があります。例えば、赤ん坊がお気に入りの毛布を持っている時、毛布は「移行対象」(transitional object)と呼ばれます。親ではなくて何か他のものがなだめるために使われます。アドレリアンは「移行対象」という言葉を用いません。毛布が母親の代わりになるとは考えないからです。毛布は赤ん坊が感覚を楽しむ何かにすぎないと考えるのです。私は毛布は、犬がある場所で眠るのが好きであるということ以上の意味を持っているとは思いません。ですから私は「移行対象」という観点から考えなければならないとは思わないのです。さて、「移行対象」がたまたま人形であれば、人形やぬいぐるみの動物が生きると想像したり、子どもが話しかけられるものであると考える理由がもっとあるように思えます。子どもはそれが生きていないことは知っています。子どもはそれと遊ぶことができます。現実のものとそうでないものの違いを知っています。そこでここでもまたこのことについて対象関係論の見地で話す必要はないと考えます。

これらのもの、人形や他のものは自分をなだめるものであると考えることができます。人間だけが習慣を持っている動物ではありません。人間はものごとをある一定のやり方で保つことを好みます。同じ種類のことを何度も何度も繰り返したいのです。子どもは同じ物語を何度も何度も聞きたいと思うでしょうし、もし間違って読めば間違いを正されるでしょう。このことが未来を予知する力を作りだします。それは子どもにとって情報の源泉です。そこで子どもがぬいぐるみの動物を持っていようと、親指を吸おうと、特定の種類の毛布、枕を持っていないといけなかったり、壁から壁紙をはがしたり、あるいは糸を窓のカーテンなどから引っ張り出したりするのであれ、これらは気持ちがいい反復される行動です。何か他の意味を持っている必要はありません。動物も行なっていることです。動物が巣を作っているのを見れば、同じことを何度も何度もしているのを見ることができます。これは私にしてみれば人間の脳に組み込まれた種類の行動です。

主婦であり、家事をする妻は、同じものを何度も何度も磨き上げるでしょう、そうする必要が

ない時でも。コインを集める人は、同じコインを何度も何度も数えるでしょう。その行動は儀式のようになります。極端な場合、強迫行動になります。この種の行動のあるものを、それができない時に人が不安になるのであれば、強迫と呼びます。このタイプの活動が処理される脳の部分があります。それがあまりに心を乱すようであれば、脳のこの部分を鎮める薬を使うことができます。精神薬理学について私よりも知っている私の息子は喜んでこのことについて説明してくれるでしょう。

一つのことを付け加えようと思います。非常に私的に思えるこのタイプの活動のことを—これは私たちが実際に話さないことなのですが—子どもたちはお互いに話したりはしないということです。「僕は夜になると親指を吸うんだ。君は夜何をしている？」というようなことをいったりはしません。しかしこの自分をなだめる活動は、集団で行うと、一番楽しいのです。一人で歌うよりは皆で歌うのを好みます。一人で食べるよりは集団で食べるのを好みます。このことはすべて人間がどんな種類の動物であるかについて私が述べたことを強調します。

コフートの「自己心理学」の中では対象のもう一つの使い方があります。そこでコフートは、「自己対象」という言葉を使っています。自己対象は、自分に何かを与えるために使われる別の人のことをいっているように思われます。例えば、私を賞賛してくれるような人、私に奉仕してくれる人、私を養ってくれる人です。このような関係は、奉仕をする人が別の人というよりも自己対象であるような関係です。さて、自己対象を持つのは気分のいいことです。誰もが1ダースくらいの自己対象を持つべきです。しかしそうしたら、あなた自身も他の人にとっての自己対象になることが避けられないのです。例えば、うまくいく結婚は、夫と妻が何か大切なことをお互いのためにできるような関係でしょう。

個人心理学の臨床的特徴

個人心理学の臨床的な特徴について話すように頼まれました。行動を理解するということから話し始めます。私自身は精神科医であり医師ですから、私も適切な診断を下さなければなりません。私の仕事においては適切な言葉を知らなければなりません。正しい書類に記入しなければなりません。患者に対して通常の実行責任を持っています。しかしそのことは、患者の行動を理解することとまったく同じというわけではありません。

精神医学においてはほとんどいつも行動を見るのに二つの方法があります。一つは患者の病気や健康、日常生活において患者が機能する能力、即ち、仕事をしたり、家族の他の成員と暮らす能力を見ること、どんな治療をするか、患者の訴えが何か、患者がどんな症状を持っているか、患者の将来、予後がどうなるかについて意見を持つことです。

患者を見る二つ目の方法は、患者の「サイコダイナミクス」(精神力動、psychodynamics)を理解するということです。サイキー(心、psyche)については今日既に話しました。「ダイナミック」(dynamic)という言葉はもともとギリシア語(dynamis)で、力を意味します。したがって文字通りにはサイコダイナミクスは、個人の中の精神力を見ることです。私は個人心理学者ですから衝動を探したりはしません。私が見るのは「動き」です。動きという言葉は容易に誤解されます。個人心理学においては、動きは患者がどこに向かっていくのか、患者の意図は何か、あるいは、患者の行動の目標は何かということに関わっています。このことに対する精神分析の反応は、行動の目標は常に本能を満たすことであるということでした。たしかに、食べることの目標はこれ以上空腹ではないようにしようというのは適切な言い方です。また、食べることの目標は食べ物を楽しむことであるといったり、夜遅く帰るまでは何かを食べるチャンスがないという

のも適切な言い方です。そこで目標について考えることは曖昧なものになってしまいます。より明確にするために「意図」(intention)という言葉を使うことにします。あるいは、あることが短期目標か、あるいは長期目標かに関して特定します。

さて、短期目標は子どもの行動に非常に容易に見ることができます。自分の子どものことを知っている母親はすぐに子どもが何を成し遂げようとしているか理解することができます。もちろん時には理解しないこともあります。しかし個人心理学の講座を受けたことのある母親は、子どもの目標が、母親からの注目を引くことであつたり、また権力闘争であることがわかるようになっています。そして、このような仕方でするまう時の子どもの意図がわかるようになり始めます。医師として私は人の短期目標も見ることができます。通常、患者が医師のところにくる時、その短期目標は援助を得ること、苦痛を軽減すること、熱を下げること、あるいは精神科医にとっては不安を軽減したりうつ状態を楽にすることです。たしかにこれらは道理にかなった目標です。

しかし精神科医はこれとは別のことを理解できます。精神力動です。患者が救急治療室にくるのは家族から逃れたいという理由からであることがあります。老婦人がうつ状態になるのは息子が今週電話をかけてこなかったからだということもあります。思春期の子どもが父親に腹が立ったので自殺すると言って脅すことがあります。そこで精神科医も診察にくる患者の「意図」を理解したいと思うのです。患者が望む援助が実際には何かを知りたいと思います。患者は私にうつ状態を取り除いてほしいのか、それとも、私にうつ状態について同情してほしいと願っているのか？ 夫には反対して私に仲間になってほしいのか？ 働かなくてもいいように診断書を書いてほしいのか？ 行動の意図を理解することは私がしなければならないことの一つです。一つのことを忘れてはなりません。患者はいつも自分の意図が何かを知っているわけではないということです。時には患者にいうことができます。「あなたがこれこれのことをしたのはお母さんに腹が立ったからですか？」と。それに対して患者は「その通り」というかもしれません。「それが私がそうしたことの理由です」。患者はこれが行動の理由であると認識するでしょう。

さて、他にも学習された行動というものがあります。行動を理解する時に学習された行動、あるいは、条件づけという概念を使うことができます。私が条件づけという概念を使うとそのことを快く思わないアドレリアンがいたといわなければなりません。しかしアドラー自身が「自己訓練」について語っていますし、訓練はまさに条件づけの一つの種類なのです。条件づけを理解するための簡単な例は次のようなものです。テレビを見ていると想像してください。おなかは減ってはいません。食べ物のことを考えているわけではありません。突然、食べ物が出てくるコマーシャルが流れます。突然、口に唾が出ます。これが学習化された行動の例です。テレビで食べ物を見ると口に唾があふれます。テレビに食べ物があるわけではありません。あるのは食べ物のイメージだけです。テレビであなたが見た画像のゆえに実際にあなた自身の身体に生理的な変化が生じたとすれば、他の画像もあなたにどんな影響を及ぼすか想像することができるでしょう。

これを取り上げて不安のような症状に適応してみましよう。不安障害になるのは次のようにしてです。実際の例をあげましよう。強盗の犠牲者である患者がいました。強盗はケンタッキー・フライドチキンのレストランでありました——日本にケンタッキー・フライドチキンがありますか？——強盗をしたのはそこの従業員でした。そこで働いていた少女が彼が犯人であることがわかりました。彼は少女を殺さねばと決心しました。そこで頭を撃ちました。しかし幸い弾は頭蓋骨を掠めました。脳震盪を起こし、意識を失いました。意識を回復したのは病院でした。ひどい頭痛がしました。しかし起こったことをすべて覚えていました。そこで警察は強盗を捜すことになりました。私のところに彼女が送られたのは頭痛がしたからです。患者が通常の治療でよくならない時は、私は頭痛の専門医と一緒に仕事をします。一週間後仕事に戻ろうとしました。仕事に戻りたかったのです。仕事に行きました。しかしレストランで非常に気分が悪くなりました。

頭痛はひどくなり、家に帰りました。頭痛があるので仕事に戻れないのではないかと恐ろしいと思いました。それからレストランの横を車で通りかかると、心臓の鼓動が早くなることに気づきました。気分が悪くなり、頭痛はいつそうひどくなります。そこでレストランが面している通りを避け始めました。ある日、別のケンタッキー・フライドチキンの側を車で通りかかりました。すると同じ感覚がしました。今や本当に当惑しました。自分が自分の家の囚人になろうとしていると感じたからです。彼女が私のところに送られてきたのはこの時点においてでした。

異常心理学を履修した学生であれば何が起こったか理解できるでしょう。これはトラウマ（心的外傷）の例だというわけです。患者のトラウマへの反応は、おそらく強盗にあった時に彼女が感じた恐怖を追体験することです。即ち、ケンタッキー・フライドチキンのレストランの近くにいるという刺激、あるいは、レストランに戻るという刺激がいわゆる「心的外傷後ストレス障害」(PTSD)において見られる感情を引き起こしたのです。脳が機能する方法は、もしも不安があれば、その不安を回避する方法を探し求めるというものです。即ち、不安への反応は回避することです。回避しようとすることはさらなる不安を引き起こします。こうして不安は一般化されます。特殊から一般へと広がっていくのです。これが脳が機能する方法です。不安は一步一步より多くのものへと広がっていきます。

心がこのことにおいて果たす役割は、心が不安の可能性に対して警戒し、避けるべきことをもっとたくさん探すということです。心は初期警戒システムを立ち上げます。そこで自分自身を守るためにより多くの不安を持つこととなります。これはいうまでもなく無駄な行動です。あまりに回避がなされすぎることです。これは心的外傷後ストレス障害がどのように機能するかのすばらしい例です。それを捕える最善の時は、最初の時、広まる前です。このようないい方が日本にあるのかわかりませんが、アメリカでは馬から落ちたら直ちに馬に乗らなければならない、さもなければあまりに恐くなって馬に乗れなくなるといういい方がされます。

脳がこのように機能するということを知った上で、アドレリアンはこの症状、この不安の目標は何かというでしょう。危険の恐れを回避することです。それに対してどのように取り組めばいいのでしょうか？ 危険は存在しないということを示すことができます。しかしもっといいのは、その人とあらゆる危険の中に行くということです。患者をすべてのケンタッキー・フライドチキンの店に連れて行くのです。リラックスするトレーニングをしてレストランに入る前に呼吸の練習をしてもらうこともできます。あるいは認知療法を使うことができます。恐怖を感じた時のこと、そしてそのことに対して何をしたかをすべて日記に書いてもらいます。これらはすべてのことは学習された行動を阻むための様々な方法です。

さて、これが症状の目標が人の長期目標に一致しない例です。誰もケンタッキー・フライドチキンのレストランの側を通る時に不安になりたいなどとは思わないでしょう。しかし、この人に既に困難なことを避ける方法を探す傾向があると想像してみてください。この人を困難な状況の中に置くのです。そうすれば、そのような人は困難な状況を避ける方法を探すでしょう。どのようにして危険な状況を避けるのでしょうか？ 家にいることです。しかしもしもあなたの良心が「仕事に行くべきよ。学校に行くべきじゃないの？」といったとしたら、どうなるのでしょうか？ 仕事に本当に行きたいのですが、「広場恐怖症」になってしまっているのです。広場恐怖症はアメリカで一人でスーパーマーケットに買物に行けない女性に私が最近見てきたよくある症状です。誰かがついて行くのであれば、行くことができます。電話やインターネットで注文することはできるのですが、一人で家から外に出ることはできません。病人になることに成功したのです。病人であることは社会で認められる役割です。このことをアドレリアンであれば、人生の課題からの退却だと見なすでしょう。そこで治療はこの人が買物をするために店に行くことを援助することにとどまらず、本当にこれらのことをしたくなるように、自分のことをよしと感じるように援

助することです。そうすれば、もはや避けることを選択しようとはせず、近づくことを選択します。

子どもたちと、子どもたちと親への関係における、また私たちが考察している患者における行動の短期目標、あるいは差し迫った目標のいくつかの例を出しました。他にも私たちは間近に迫った目標も見て、それを何度も認めることができます。男の子が女の子が好きで、彼女に自分を印象づけようとしていればすぐにわかります。あるいは、従業員が上司にいい印象を与えている時もわかります。私たちは皆社会的な行動を非常に容易に認めることができます。経験があまりなかったり、状況が私たちにとって新しければ、時には認めるのが困難なこともあります。しかし普通の発達段階を経験すれば、自分と同じ年頃の人、同時代の人に何が起きているかわかります。一般的に言えば、他の人がいつ正直で誠実であるのを認められるようになるのは、私たち自身が経験をするからです。女性が他の女性が嘘をついているのをわかるのは男性がわかるよりも早いというのが私の意見です。同じことは男性にもいえることができます。男性は他の男性が嘘をついているのを女性がわかるよりも早くいいあてることができます。そして女性が信じようとしていることに驚いてしまいます。古いアメリカの歌を思い出しました。「私がずっと嘘つきであることを知っているのに私があなたを愛しているといった時どうして私を信じることができるのか？」

広場恐怖症になる人はどうしてそうなっているのか知りません。起きていることに気づいていません。知ったら恥ずかしいからというわけではありません。本当に不安を感じているのです。何が起きているか理解していません。「おや、私の不安が一般化している。それが心的外傷後ストレス障害の原因なんだ」ということはできません。

さて、行動の長期目標はパーソナリティの特質と傾向です。あるいは、聞いておられる方の中の精神科医とセラピストのためにいうと、DSM-IV（精神疾患の分類と診断の手引き）の第2軸です。アドラーは異なったタイプについて話しました。モザクは「ライフスタイル」の違いに応じて異なったタイプについて話すことを好みました。人は独自で互いに異なっているので、多くの点で似てはいるけれども各々の人はそれでも少しは他の人と異なっています。それにもかかわらず傾向やパーソナリティのタイプについて話したいと思えば、100パーセントではないとしても大体の時どんなふうにも同じように思えるかについて話さなければなりません。そこで一般的に、ある人は他の人よりも活動性が高い、また、ある人は他の人よりも興奮しやすい、じっとすわることができない、あるいはまた、ずっと休んでいたい人もいえることができます。このような「性格傾向」に加えて長期目標の違いもあります。例えば、他の人よりも権力に関心がある人がいます。好かれることに関心がある人もいます。私の息子と私が診ていた患者で、目標は他の誰よりも多くのお金を持つことであるとはっきりと認めた人がいました。お金をたくさん稼ぎましたが、その際敵もたくさん作りました。敵がたくさんいるのでたくさんのお金を払っています。とりわけ弁護士にたくさんのお金を払っています。私の知っているある教授は、他の誰よりも賢くなりたいと思いました。誰よりもたくさんを知りたいと思いました。そこで、非常に知識の小さい領域を選びました。そしてこの分野で世界的な権威になりました。

大抵の人は理に適った長期目標を持っています。大抵の人は他の人とうまくやっていきたい、ほどよく幸福でありたい、人からよく思われたい、自分のことをよしと感じたいと思います。このような合理的な目標を持っている人は、どんなにしても面倒なことにまきこまれることはありません。しかし私たちが通常治療している人は、どこかで誤りを犯した人なのです。これは個人心理学においては非常に重要な概念です。そこでアドレリアンにとっては、誤った考えについての概念は、何が誤っているかを理解する際に重要な概念です。人はどんな間違いをすることができるでしょう？ 自分自身について誤るかもしれません。他の人が望んでいるものについて間違

った考え方をするかもしれません。人生において必要なことを誤解するかもしれません。

なぜ人は誤りを犯すのでしょうか？ 個人心理学者にとって、これらの誤りは、通常子どもが正しい判断ができる年になる以前の人生の早い段階でなされます。親が何かをすることができなかつたからかもしれません。例えば、受け入れられてないと感じる子どもは、この世界で歓迎されていないと感じます。過保護に育った子どもは課題と困難に立ち向かうことができないと感じるかもしれません。あるいは、過度の野心を持つ子どももいます。即ち、ほとんど誰もできそうにもないことをやってみたいと思うかもしれません。しかし、あまりに達成するのが困難であったり、不可能だったりするのです。そこで結局状況に立ち向かえないと感じて、勇気をくじかれたり、誤った行動をし続けるかもしれません。

さて、このことが意味するのは、このような人を治療するにあたってのセラピストの仕事は、誤りが何であるかを理解し、その人が何が誤りかを理解するのを援助することであるということです。このことは非常に威嚇的になることがあります。「あなたはこれまでの人生、ずっとまちがってきた」というようなものだからです。慎重にいわなければなりません。率直にいうのではなく、自分で気づくような仕方でいった方がずっといいのです。しかしそれからは人を再教育する仕事もあります。誤りを見るのを援助しないといけないだけではなく、矯正し、新しいやり方でものごとに取りくむよう援助しなければならないからです。

どのようにして誤りを見出すか？ 私が一番よくするのは子どもの早期回想を見ることです。しかしそれだけが唯一の方法ではありません。時には早期回想から情報を得ることができないことがあります。いつも情報を得られるほどは賢くはありません。野田先生と勉強していれば、きっと早期回想を読み、早期回想が人について何を語っているかを理解することを試みる経験をいくらか持っておられるでしょう。早期回想は通常私たちが「ライフスタイル」と呼ぶものを定式化することを可能にする三つのことを私に与えます。

この言葉がトラブルを引き起こしたことを知っています。この意味で「ライフ」(life)を使うことは混乱させるからです。ドイツ語では「生き方のスタイル」(Lebensstil)であり、初期のアドラーは、ドイツ語では「人生計画」(Lebensplan)という意味のさらによい言葉を使いました。私たちが見つけ出すのは、実際には人生計画なのです。「スタイル」は人生計画から出てくるものにすぎません。交流分析と呼ばれる学派を知っている方はおられますか？ 交流分析について書いたエリック・バーンは「台本」(script)という言葉を使いました。バーンはカリフォルニアに住んでいましたが、そこでは台本は、映画のための計画でした。バーンは台本について、あたかも各々の人が自分自身の台本を書き、それを演じるかのように書きました。私が大抵早期回想から自己イメージや、世界像を得ることができると思うのはこの意味においてです。自己イメージを世界像から切り離すことはできません。その世界から自己イメージを取り出すことはできないからです。自己は常に世界の中にあるのです。そこで自己イメージは自己と世界の中の他のすべてのものとの関係です。ドイツの実存主義者は「現存在」(Dasein)という言葉を使いました。そこにあるということ、世界の中にあるということ、そして、世界への反応、即ち、「この世界でどうしていくのか」という意味です。これが、私が思うに、早期回想から引き出すことができることです。

子どもたちの共同体感覚を発達させるには

「子どもたちの共同体感覚を発達させるために親、教師、セラピストは何ができるか」について話すように頼まれました。カレン・ホーナイは 1937 年に出版した本の中で、子どもたちに必要なもののリストを作りました。暖かさや愛情、支えられること、導かれること、安全、ホーナ

イのいう「健康的な友情」、葛藤に対処できること、すべてがうまくいくようにできること、必要な時は妥協しないことです。小さな子どもを研究している人が研究しているもう一つの重要なことは、一貫性です。一貫しない行動は混乱と不信を招きます。そこで、いくつかのルールができます。「何かをすることをおきながらそれをしないことがあってはならない」「子どもをけなさないこと」。子どもが誤りを犯したら…そう、子どもは誤るものです。誤ったからといって子どもをけなしてはいけません。「大きくなったらもっと上手にできるようになるよ」といしましょう。勇気づけましょう。子どもを賞賛し、大切にしましょう。その上で、適切な行動のための規則を定めることができます。不適切な行動にはだめだといきましょう。だからといって子どもをけなしてはいけません。このようにすることを「帰属」(attribution)と呼んでいます。子どもにあなたの望む行動を帰するのです。「君はそれができると思うよ。やってみようという気になったら、できるよ」といしましょう。子どもはいいいます。「僕にはできない。むずかしすぎる」。「君を信じている。どうしたらいいか方法を見つけ出せるよ」といしましょう。このようにいうことは、子どもに勇気を与えます。「ねえ、僕のお母さんは僕ができると信じてるよ。きっとできるよね。たぶん、お母さんは正しい」。教師は絶えず子どもたちにこのようにしています。子どもを勇気づけましょう。

アルフレッド・アドラーにこのような話があります。アドラーのところにある先生がこの子は字が下手だといって子どもを連れてきました。これは子どもが字が上手で、はっきりと書くことが大切だった頃の話です。先生は子どもを連れてきた時、子どもが書いたものを持ってきていました。当然、子どもは恥ずかしい思いをしていました。アドラーは子どもの書いたものを見ていました。「これ、すごくきれいな〈L〉だね」。

勇気づける時ももっともよく教育ができます。勇気くじきではできません。子どもは人を喜ばせることがしたいのです。小さな子どもたちは先生にほめられるのが好きです。しかし思春期の子どもは違います。なぜなら思春期では子どもたちは既に先生を別のカテゴリーに入れており、先生の意見はもはや重要ではないからです。そこで思春期の子どもたちを援助するには、先生からではなくて仲間から認められるように援助するのでなければなりません。いずれの場合も、子どもが必要なものが何であるかを理解すること、そしてこの必要を大事にするような仕方であること、つまり、よき友人であること、情愛のある親であること、親切な権威であること、一貫し、信頼できる、この世界において何か確固たるものであること、そして子どもに興味深い仕方世界を提示することが必要です。最後に、そしてこれは重要なことですが、子どもたちに貢献し、貢献することで価値があると感じられる機会を与えることです。

ロバート・シャルマン先生への質問

——ロバート、シャルマン先生は父親としてどんな人だったか少し話していただけませんか？

三時間もビデオのファインダーをのぞいています。突然のことでとまどっています。でも父親について話す用意はいつもできています。私は実際父が私の父であることを非常に特権的なことであると考えています。父がしてきた貢献がどんなものかわかるからです。子どもだった頃、アドレリアンの集まりに行くと父がどのように隅されているかを見たものです。父はいつもよく思われ、尊敬されていました。父はよい影響を他の人に与えたように思えました。さて、私が小さかった頃—父は今と違っておじいちゃんだったわけではないのですが、父が何かを決めたら、それが絶対的なものであることがわかっていました。父が話している時、家で実践していると感じ

たことは一度もありませんでした。当然だと思いました。母は叫んでいましたし、父は冷静に事態はどうあるべきか述べたものです。大きくなっていく時、私は母とはいつも喧嘩できましたが、父とは「議論」しかできませんでした。父が何かを決めた時、私はその規則を尊重しなければなりませんでした。

これまでの人生で、私は家からしばらく離れていたことがあります。18歳の時に大学に入るために家を出たのです。そして2000マイルも離れて住みました。父も母もそのことを残念に思っていたでしょう。私は何年か目的もなくふらふらして、満たされない思いがしていました。でも、人生においてもっと生産的なことをしなければならぬと悟った時、ついに家に帰って医師になってもいいといえるようになりました。このように決めた後は、私にとってすべてはずっと容易なものになっています。

父と一緒に仕事ができることは、この上もない名誉なことです。医師としての訓練を受けている時、私は精神分析の運動、シカゴのコフトの運動の指導者と接触する機会がありました。彼らの言葉は当然私にとっては外国語に等しいものでした。しかし精神分析の先生たちに会った後、彼らは私の父の足元にも及ばないと思いました。ここでもまた言葉の問題だったのかもしれませんが、父は私が治療しているのを見た他の誰よりもずっとすぐれた仕方で見ることができると感じました。さて、父と私は一緒に働いていますから、病院の患者と一緒にいることができます。診察日は違います。父は誰からも愛されています。当然のことながら私は若い、未熟な医師として蔑かれています。でもそれでいいのです。

また父が行なった貢献を見ることができます。アメリカでも見てきました。私は今他の医師に教える立場にいます。ある主題について話をします。すると必ずある時期父の生徒だった人に会います。いつも話の後でやってきて、すてきなことをいってくれます。今、父の生徒である野田先生が日本で行なってきたことを、父の貢献が樹木のように大きく育っていることを、目の当たりにしています。私が小さかった頃、父はドライカース先生、モザク先生とともにシカゴにアドラースクールを作っていました。彼らはアメリカ中に生徒がいます。日本では野田先生が同じことをされていることがわかりました。正統の流れがこうして脈づいているのを見ることができます。私は父は直接アルフレッド・アドラーとドライカースに繋がっていると話します。この流れを通じて、野田先生を通じて、アドラーへとさかのぼる直系の流れから、日本は恩恵を受けてきたのだと思います。

大きくなるにつれアドラー派の用語は私にとって第二の天性になりました。私は自分は功平ということ強く意識する典型的なアドラー派のいう中間子であると思っています。しかし人生においてしなければならぬことを決めた時、それは生産的であること、貢献することと関係があることでした。当時私はこれが個人心理学の教えであるとは知りませんでした。しかし明らかに父はこの考えを取り上げ、子どもだった私の「サイキー」の中に何とか植え付けようとしたのです。あらゆることを考えて、父はよい仕事をしたと考えたいです。

シャルマン先生の答え

誤解を正したいことがあります。ロバートは非常に謙虚だと思います。私はロバートと一緒に働けることを私の特権であると考えています。私と一緒に働きたいといった時、私は大変嬉しかったです。望めば誰とでも仕事ができただからです。ロバートは、既に私たちのオフィスにおいても、地域においても、もっとも優秀な若い医師です。誰もが彼の助言を求めてやってきます。政治も上手です。私はロバートのことをほんとうに、ほんとうに誇りに思っています。

更新履歴

2012年12月1日 アドレリアン掲載号より転載